

祝 辞

日本農業気象学会北海道支部長 堀 口 郁 夫

日本気象学会北海道支部が、創立 30 周年を迎えた事を心からお喜び申し上げます。

30 年前の気象の研究や観測の置かれた立場と今日を比べると、隔世の感があります。30 年前はようやく戦後の混乱から立ち直った時期で、気象の研究や観測に対する人々の関心は特定の人達に過ぎませんでした。しかし、今日経済の発達によって、多くの人たちが直接・間接に気象に深い関心を持っており、そのため気象の研究の重要性は益々増大しています。そして、この 30 年間の気象学の発達も目ざましいものがあり、その成果は現在の気象台における気象業務に広く応用されていることは衆人の認めるところです。



北海道は厳しい自然条件にあり、開拓以来農業や漁業振興のため気象の観測・研究の重要性が認識され、既に札幌農学校で気象に関する講義が行われていました。気象の厳しさによる研究の重要性は今日も変わりなく、北海道から多くの優れた研究成果が今後も生まれてくることを期待されています。

我々の農業気象学会北海道支部も、気象学会北海道支部と同じように、戦後の混乱がようやくおさまった、昭和 27 年に支部会を設立し、初代の農業気象学会北海道支部長は、初代の札幌管区台長八鍬利助氏が就任しています。以来、気象学会と農業気象学会は共に深い関係にあり、過去に両学会は合同で旭川で特別講演会を開催したり、また、気象庁長官になられた高橋浩一郎氏や東京管区気象台長をされた日下部正雄氏も、農業気象学会北海道支部の役員や会員として活躍された事もあります。両学会は今後ともお互いに緊密に連携して、それぞれの発展のため協力して行きたいと念じています。

現在、農業気象の研究は、農村の都市化、米の減反による農業構造の変化などのため大きな曲がり角にあります。そしてバイオテクのための研究、高度情報社会に対応した研究が要求されだしており、そのため、一部では気象学と農業気象学の分野はますます重複して行く傾向にあります。そのため最近、特に両学会が連絡を密にして支部会を運営していることは大変喜ばしいことです。

両学会のみならず最近の研究は、一人単位の研究から組織単位の研究へ、更に大きな単位の研究へと発達する傾向にあります。また学会の枠を越えて共同研究が行われつつあるとき、気象関連学会の会員がお互いに手を結び合って共同で研究しあう方向を捜し出す時期に来ていると思います。